

平成 29 年度高知県立農業大学校の外部評価について

第 1 回 平成 29 年 7 月 11 日

第 2 回 平成 30 年 2 月 5 日

場 所 高知県立農業大学校  
本館第 1 教室

1 外部評価委員名簿

氏 名	所 属
田中 彰治	高知県立高知農業高等学校長
小八木 喜尊	農業生産法人（四万十みはら菜園代表取締役社長）
鈴木 郁馬	高知県指導農業士連絡協議会会長
小田々 智徳	コウチ・アグリマネジメント・クラブ会長
国広 純一	四万十農業協同組合常務理事
西込 浩一	先進農家等留学研修受入農家代表
武樋 南海雄	高知県立農業大学校同窓会長
入交 誠一	高知県立農業大学校後援会長

2 外部評価

評価基準		
A	十分達成できている	100%以上達成
B	おおむね達成できている	100 未満 80%以上
C	どちらかというと達成できていない	80%未満 60%以上
D	ほとんど達成できていない	60%未満

平成 2 9 年 度 高 知 県 立 農 業 大 学 校 評 価 表 - 1

評価項目	課題	目標	具体的方策	自己評価 (内部評価)		外部評価 (委員からのコメント)		今後の課題と取り組み
					評価		評価	
魅力ある学校づくり(学生の確保)	<p>○平成28年度、29年度入校生は定員の半数以下。</p> <p>○応募は農業高校及びコース校が全体の約半数と割合が高い。</p> <p>○農業高校との連携をどのようにとっていくのか。</p>	<p>○入校者 50名以上</p>	<p>○高校ガイダンス(5校)</p> <p>○オープンキャンパス(参加41名)</p> <p>○高校訪問(46校)</p> <p>○ラジオ、テレビ、新聞報道等(5回)</p> <p>○ホームページによる情報発信(各専攻紹介)</p> <p>○推薦募集要件の改正(受験科目の変更)</p> <p>○農業高校、コース校との連携強化</p>	<p>○応募者数</p> <p>推薦 26名</p> <p>前期 11名</p> <p>後期 5名</p> <p>合計 42名</p> <p>(前年33名)</p> <p>○合格者数 33名</p> <p>(前年25名)</p> <p>○入校者数 36名</p> <p>(前年24名)</p> <p>(内、畜産 2名)</p> <p>(内、女性 9名)</p> <p>(内、農業高校 17名)</p> <p>(内、農業コース 6名)</p> <p>○HP閲覧数 45.117pv</p> <p>(昨年比 118%)</p> <p>○農業教諭との研修会 11名参加</p>	B	<p>○新しい取組みがあり意欲的な姿勢が感じられる。</p> <p>○社会人・大卒への募集拡大が必要である。</p> <p>○推薦合格者の基礎学力の底上げが必要である。</p> <p>○農業高校(幡多農)での出前授業が十分でない。</p> <p>○高知農大でしか学べない技術の発信が有効ではないか。</p> <p>○四年制大学編入の実現を期待する。</p> <p>○学生による情報発信が良いのでは。</p> <p>○県外へ出た25～26歳の県出身者へアピールしたらどうか。</p> <p>○担い手育成センターとの違いを明記すべき。</p>	B	<p>○推薦入試の早期化(8月29日)</p> <p>○Wi-Fiの活用(SNSへの投稿)</p> <p>○高校での出前授業の実施(高知農業等)</p> <p>○農業教諭との研修会(テーマ:GAP等)</p> <p>○作物の栽培課程</p> <p>○授業風景の動画などHPの工夫</p>

評価項目	課題	目標	具体的方策	自己評価 (内部評価)	評価	外部評価 (委員からのコメント)	評価	今後の課題と取り組み
(カリキュラムの充実)	進路別カリキュラムの実践	○GAP理念の浸透 ○継続的な取り組み	○講義内容の充実 (GAP、IPM、環境制御、篤農家経営) ○進学希望者指導 (小論文: 要約指導)	講義の内容 GAP 6時間増 IPM 4時間増 環境制御 4時間増 篤農家講義 7農家	A	○GAPに取り組んで欲しい ○高知県が目指す農業クラスターの中で力を発揮できるように、栽培知識だけでなく、6次産業化など幅広い視点で充実させてほしい。	B	○G-GAPの取得 ○進路希望別コースの設置
(基礎学力の向上)	基礎学力に学生間差がある	○基礎学力の向上(学校全体のレベル向上)	○農業計算の補習	○計算力の向上(2年) 69.5点 ⇒ 80.9点 (平均11.4点上昇)	A	○推薦で早く進路が決まれば、高校で勉強をしなくなる。 ○就農には農薬、肥料計算は必要である。	B	○入校までに課題を与える。 ○基礎学力の向上 (農業計算、文章力)
(学生の生活指導の充実)	○規則違反、マナー違反が散見される。  ○社会人としての意識向上。	○自主的活動の実践  ○社会人としての意識向上	○生活指導の充実  ○接遇の講義導入	○目安箱を設置 ○メンタル面の指導方法の研修実施(職員対象) ○カウンセリング (1年生24名で実施) ○接遇の特別講義の実施	B	○カウンセリング、接遇導入は良いと思う  ○挨拶と5S(整理、整頓、掃除、清潔、躰)が大切	B	○科目「社会人基礎力向上」の実施 ○“カイゼン”指導  ○トイレの掃除に学ぶ研修の実施

## 平成 2 9 年 度 高 知 県 立 農 業 大 学 校 評 価 表 - 3

評価項目	課題	目標	具体的方策	自己評価 (内部評価)		外部評価 (委員からのコメント)		今後の課題と取り組み
					評価		評価	
専門性の向上(オランダとの交流)	○レンティス校との交流目的の明確化	○オランダとの交流実施	○オランダ学生を受け入れて本校学生と文化交流 ○オランダでの先進技術の習得	○レンティス校から受入れ7名(6月) ○オランダへ派遣7名(12月)	B	○オランダ以外への派遣を検討してはどうか。 ○オランダ交流の出口を明確にすべき。	B	○オランダ訪問団への参加
(プロジェクト活動の強化)	○課題解決のための計画、実行、分析能力の向上	○全国プロジェクト発表会での発表者1名以上	○プロジェクト(卒論)の進捗管理	○各論、ゼミを実習に連動させた指導 ○実習後の実習日誌の指導 ○卒論の評価点 平均 73点 全員合格	B	○卒論作成時の表、グラフ作成やパワーポイント操作は卒業後も役立つ ○プロジェクト活動は座学や学校行事を踏まえ、計画的に実施する必要がある。	B	○卒論の課題設定を地域課題と連動
(法人の求める能力の育成)	○農業法人からは即戦力を求められている。 ○農業法人との連携 ○求人情報の収集。	○法人就農者の確保	○法人との意見交換会 法人での研修7カ所 先進農家等留学研修  ○労務管理のカリキュラム導入 労務管理入門(1年) 労務管理基礎(2年)	○生産法人への雇用就農者8名 (うち、次世代型1名)	B	○農大生の雇用は農作業員としてではなく、リーダーシップを取れる人材を考えている。勉強をする癖をつけて欲しい。 ○コミュニケーション能力を上げることが重要である。 ○自社商品を上手く説明できる営業力が必要である。	B	○生産法人へのインターンシップの実施

平成 2 9 年 度 高 知 県 立 農 業 大 学 校 評 価 表 - 4

評価項目	課題	目標	具体的方策	自己評価 (内部評価)		外部評価 (委員からのコメント)		今後の課題と取り組み
					評価		評価	
(各種資格・免許取得)	○資格免許の合格率の向上 ○補習の充実	○合格者及び免許取得者の確保	○資格取得のための補習の実施 ○資格・免許等 危険物乙種4類取扱者 毒物劇物取扱者 日本農業技術検定 フラワーアレンジ エクセル3級 土壤医3級 フォークリフト 小型車両系建設器機 狩猟わな免許	○合格者 乙種4類取扱者 2名 毒物劇物取扱者 0名 農業技術検定2級 4名 農業技術検定3級 16名 アレンジ2級 2名 アレンジ3級 4名 エクセル3級 12名 土壤医3級 4名 フォークリフト 23名 小型車両系建設 19名 狩猟わな免許 5名	B	○就職後は時間的制約等から、できるだけ学生時代に取得させて欲しい。 ○資格を取得することも良いが、農業経営に必要な知識(簿記、労働管理)が大事である。 ○大特免許も必要である。	B	○カリキュラムと連動した資格・免許取得指導の強化
進路支援活動の強化(就職活動の支援体制の強化)	○卒業後直ちに就農できる学生は少ない。 ○就職活動の意欲が低い学生が散見される。 ○雇用就農できる生産法人の開拓	○進路内定率 100%	○キャリアプラン作成 ○求人情報の把握と紹介 ○海外農業研修の情報提供 ○四年制大学への編入支援 ○就職ガイダンスの実施 ○高知大学の編入に向けた移行カリキュラムの確認	○キャリアコンサルタントの特別講義実施 ○求人情報 県内企業 23社 県内求人数 140人 県外企業 37社 県外求人数 595人 ○進路先 就農 5名 雇用就農 8名 就職 7名 就農向け研修 1名 進学 1名 ○進路内定率 100%	B	○学生の進路希望に対して、向き不向きを考慮して、教職員から適切なアドバイスが大切。 ○四大編入の実績を作ってほしい。 ○四年制大学への編入、特に高知大学への制度化をお願いしたい。	B	○進路希望別カリキュラムの新設 ○四大編入に対応できるカリキュラム編成 ○インターンシップの強化

平成 2 9 年 度 高 知 県 立 農 業 大 学 校 評 価 表 - 5

評価項目	課題	目標	具体的方策	自己評価 (内部評価)	外部評価 (委員からのコメント)	今後の課題と取り組み
				評価	評価	
(就農支援)	○将来の就農ビジョンが明確でない。 ○農業の厳しさを十分認識せず、投資事業に申請する学生がいる。	○就農率 50%	○農業次世代人材投資事業(準備型)の適正な活用 ○就農に向けた栽培・経営計画、目標の明確化 ○地域担い手協議会と連携	○投資事業 1年0名、2年3名  ○就農の区分 親元就農 5名 雇用就農 8名 合計13名、59%	A  ○今後も就農者を増やして欲しい。 ○地域でのコミュニケーションの取り方や生産部会、青壮年部の活動の在り方について周知して欲しい。 ○卒業して10年後にどうしているかアンケートを取ったらいと思う。	A  ○投資事業の適正な活動連携支援 ○地域担い手協議会との連携強化 ○JA高知市青壮年部との意見交換会 ○就農後のフォローアップ調査の実施
教職員のスキルアップ(研修の強化)	○生産現場の課題をいち早く授業に取り上げて円滑な就農に結び付けることが必要。 ○若者の心理を踏まえた教育指導技術の向上が必要。	○各種研修への参加	○研修 グローバルGAP指導者研修(国) JGAP指導者研修 臨床心理士による研修 高校教諭との意見交換	○参加状況 G-GAP(国) 2名 JGAP(県) 1名 新任者研修(国) 3名 農業機械研修(国) 1名 西日本野菜研修 1名 高校教諭との意見交換 1回実施	B  ○教育者として常に新しい技術・知識を習得することは大事。 ○GAPは認証を取得できれば、教員及び学生の意識が向上するのではないかと思う。 ○教職員は横のつながりが大事 ○スキル、経験が農大の財産。 ○他校の取り組みを研究して欲しい。	B  ○積極的に研修を受講